



愛知淑徳大学

URL=<http://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html>

## ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

## Newsletter

第44号

発行年月日: 2017年10月15日  
 〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9  
 Phone 0561-62-4111 ex.2498  
 FAX 0561-63-9308  
 E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

## IGWS 第44号ニュースレター目次

- 第34回定例セミナー報告 ..... 1・2
- 第34回定例セミナー学生感想文 ..... 3
- 「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第1回成果発表公演のご報告 ..... 4・5
- エッセイ: “自分らしく”あることを考え続けた、今の結論 ..... 6
- エッセイ: ジェンダー視点を含めて日々感じていること ..... 7
- 第35回定例セミナーのお知らせ ..... 8

2017年6月30日、長久手・星が丘両キャンパスにて、第34回定例セミナー「母と娘の関係を考える～愛情という名の支配～」を開催しました。以下、その概要をご報告いたします。

## 第34回定例セミナー

## 母と娘の関係を考える ～愛情という名の支配～

講師 信田 さよ子さん  
 (原宿カウンセリングセンター所長)



今回のセミナーでは臨床心理士の信田さよ子さんを講師としてお招きした。信田さんは長年にわたって様々な依存症の当事者や家族をカウンセリングしてこられ、なかでも母娘関係のスペシャリストである。母娘関係といえば、今年の正月明けからNHKで放映された連続ドラマ「お母さん、娘をやめていいですか？」(井上由美子脚本)が記憶に新しい。娘が一人の男性と出会うことで、友達のように仲の良かった母娘の関係が恐ろしいまでに変化していくアンチ・ホームドラマである。実はこのドラマの臨床心理の考証をされたのが信田さんだった。

信田さんによれば、団塊世代の女性が母との関係について相談に来るようになった1970年代に母娘関係が初めて問題系として浮かび上がってきたとのことだ。第二期は1996年にブームとなった「アダルト・

チルドレン」がきっかけとなり、これが母娘問題の源流となった。第三期は信田さんの著書『母が重くてたまらないー墓守娘の嘆き』が出版された2008年である。「アダルト・チルドレン」とはもともとアルコール依存症の家族の中で育てて成人した子どもを指すが、とりわけ娘の場合が多い。父がアルコール依存症である娘は「良い」子になるという。父の暴力に無力な母に対して娘はどう対処しているのかわからず、「良い」子を演じるようになるからである。第四期は当事者本が続々出版されるようになった2012年である。田房永子はコミック『母がしんどい』で母へのトラウマを、また小川雅代は『ポイズン・ママー母・小川真由美との40年戦争』で女優・小川真由美との壮絶な愛憎関係をそれぞれ著した。以後「毒母」「毒親」という言葉が流布していく。



# 学生感想文

鈴木 萌加

講演会の中で語られた話は、思い当たる節がありすぎた。

講演会は「現在の自分の生きづらさが親との関係に起因すると認めた人」を指すアダルト・チルドレンの問題を中心に、親子、特に母と娘の関係の在り方を考える内容であった。実は私自身も、以前からアダルト・チルドレンの傾向があるのではないかと考えていた。特に中学生の頃までの私は、母の顔色を常にうかがい怯えていた。あらゆる場面において、悪いことは全て自分のせいと考えてしまう。母は母で、日常的に「疲れた、死にそう」と悲痛な声で連呼する。一方で、専業主婦として子どもを中心に生活し、家事は完璧にこなさないと気が済まない。このような家庭で育った私は、常に清潔な家に暮らし、毎日美味しい家庭料理を食べられる幸せを感じていた。信田さんの言葉を借りれば、私は“とても良い子”だった。

だが、現在の私は、まだ不完全ながらも母の支配から逃れつつある。母と自分は別の人間だと考えられるようになり、母親の感情に飲み込まれないようになってきた。そのように変化できた理由は講演会で初めて自覚した。私は何気なく「なぜ母はこうした行動を取るのか」について分析していたのである。信田さんはこれを「母親研究」と呼び、母の行動の理由を母の過去を踏まえ分析することが、母の支配から逃れる方法

として効果的だと説明していた。たしかに私の場合、母を分析することで、母を絶対的な存在ではなく一人の人間として俯瞰して見る事が出来るようになったために、気が楽になった。自分を振り回す存在の母に対して「どうしたら喜んでくれるのか」ではなく「この人は所詮こういう人間なんだな」と考えられるようになったのは明らかな進歩である。信田さんが「親の磁場に飲み込まれないようにするのが大事」と仰ったのはまさにその通りであった。磁場から逃れるためには、親と子とは別の人間であり、親の人生に子が責任を持つ必要は無いと自覚できる手段を得るのが大切ではないだろうか。

親子の繋がり強さは親孝行であるなどと好印象で捉えられがちだが、必ずしもそうではない。「かわいい子には旅をさせよ」ではなく「かわいい子を離さない」に成り果てた親子関係の中に、真の愛情は存在しない。親子の縁が切れにくい現代においては、「愛情」という名の支配が生む依存関係からの脱却と、自らの意思に従い個人で行動ができる親子関係の構築について、模索せねばならないと感じた。

(文学部国文学科4年)

出口 ななほ

先日、愛知淑徳大学にて信田さよ子氏の講演会が行われた。氏は母娘問題の専門家、今回の講演会も母娘問題について語っていらっしやう。印象に残ったエピソードがある。大体このような意味だったと思う。

「NHKの『お母さん、娘をやめていいですか?』というドラマの感想で、この問題を知らなかった、ドラマで始めて知ったという感想があった。私は長年その問題に取り組んできたので、その感想にはびっくりした」

私もこのエピソードにはびっくりした。既に広く知れ渡っている問題だと思い込んでいたからだ。インターネット上では(特定のコミュニティではあるのだけど)毒親の話だとか、関係性がおかしい家庭の話などが大量に流れ込んでくる。その為、当たり前世に知れ渡っていると思い込んでいた。自分の知らないコミュニティではそんなこともなかったのかもしれない。

そのような前提があるとすると、聴講者の中にも、あまり知らないけど聞きにきたという人がいたかもしれない。氏の話は、初学者にも分かりやすいように、あまりアカデミックな単語や要素は出てこなかった。誰が聞いても分かりやすい構造になっていたと思う。

この問題について語る人々は5、6年前から増えたように感じる。当事者(娘)が語る話であったり、専門家が論じる話もあった。何冊か、関連書を読んで思ったことがある。誰が悪いとは決めつけられない問題だな、と。娘が被害者で、母親が加害者だ、などとは言えない。では、子の親への愛は無条件で無償だからか、そういうことを考えても違うと思う。絶対的な答えはなく、ケースに応じて1つ1つ紐解いていくしかないのだろう。場合によっては母娘問題の解決は諦めるしかないのかもしれない。解決しない問いを考え続けても疲れるだけだ。そして、人間の持っているエネルギーは案外に少ない。

講演の後に、質問の時間があったが、男子学生の質問が多かったように感じた。それは良い傾向だなと思った。直接的に関わることは少ないかもしれないが、興味を持っている、関心を持っている人もいるというのは問題解決において心強い。何かの可能性を感じた。今回の講演会は、幅広い啓発には非常に良いものだったと思う。

(創造表現学部創造表現学科1年)



## ご報告

## 「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第1回成果発表公演のご報告

きゃんでいすくらんぶる ～透明な境界線を越えて～



本年度からジェンダー・女性学研究所が「ジェンダー・ダイバーシティ」プログラム<sup>(1)</sup>を提供することになりました。プログラム開始にあたって前期開講「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習I」、前期（夏季）集中開講「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習II」が新設されました（以下、「GD表現演習」）。私たちは賛助教員として「原則見学だけの授業来訪は不可、継続的な参加」が条件で授業に参加させていただきました。一連の授業の概要および成果発表公演について報告します。

GD表現演習は、オムニバスの授業形式をとっており、担当は本学創造表現学部の角田達朗教授、劇作家・演出家で本学非常勤講師の刈馬カオス先生、振付家で本学非常勤講師の山田珠実先生です。前期・集中それぞれ15回の授業ですが、両方の科目を合わせて履修すること、学外活動として実施する公演と前日リハーサルにも必ず参加すること、加えて公演日はもとより授業の欠席もほとんど許されないといった条件があります。そうした厳しい条件にもかかわらず25名が最後まで参加しました。

これらの授業は2013年度特別教育研究プロジェクト「演劇的アプローチによる『違いを共に生きる』啓発プログラム」の成果に基づいて編成されています。



報告書のタイトル「問い直しの輪を広げるために」<sup>(2)</sup>が示しますように、このプロジェクトは、参加者がジェンダー論分野での思想を深めるだけでなく、演劇の上演という形を取ることで、問い直しの輪を観客へと広げていく実践でした。

上記プロジェクトでとられた基本方針「参加者が自らの当事者性を問い直し、それを虚構の枠組を通して提示する」「舞台に立つすべての者が主人公である」「多様な視点・多様な語りを吸収する」<sup>(2)</sup>はGD表現演習でも貫かれています。まず教員がそれぞれ自分のジェンダー観・セクシュアリティ観について語る時間を持つことで実践の入り口に立ちました。学生たちは前半授業で出された課題に取り組みながら、ジェンダーやセクシュアリティに関して当事者問題意識を培いました。舞台に立つ上での体づくり、コミュニケーションの取り方なども並行して指導されました。



後半授業では、前半で培った当事者問題意識に基づき、学生たち自身で表現のためのトピックを考え、話し合いながらまとめ、パフォーマンスしていくことを求められました。そのような授業に参加させていただき、学生たちの協調性の高さや粘り強さ、頑張りや柔軟性、そして積極的な姿勢を見せてもらいました。最後まで役作りで苦しんだ学生もいました。台本のテキストとの距離の取り方、自分の立ち位置をどう表現するかが難しい課題の一つでもあったのです。

それぞれに課題を抱えながら迎えた本番ではありましたが、授業全回を通じて、共に考え、話し合い、頑張ってきた“仲間”となった学生たちの底力は、公演当日に発揮されました。演劇経験の全くない学生も多い中、大勢の来場者を前に緊張が高まっていました。しかし、劇場入りしたときから、過剰な心配や緊張がないようお互いに気遣い合う姿が見られ、とても楽しい空間になっていました。また、本番では、予期せぬ出来事



が起ることは避けられないものです。今回も、予期せぬ事態が見て取られ、スタッフはヒヤリとしました。しかし、出演者ひとりひとりの一瞬の判断で、見事にその場を収め切りました。学生たちは素晴らしい判断力とチームプレイを見せてくれました。これらは、学生たちひとりひとりが脚本の内容や意味、パフォーマンスの目指すところなどをきちんと理解し、自らの体で表現することについて研鑽を積んできた成果のひとつであったと思われます。

今回の授業では、ご指導をいただいた先生方の専門性もさることながら、人間的な魅力が学生を引っ張り上げ、パフォーマンスをまとめ上げたことは言うまでもありません。これらの出会いや経験は、学生たちのこれからの人生や価値観に多大な影響を与えたことでしょう。私たちが目の当たりにしたのは、学部も学年もジェンダーも越えて、まさに「違いを共に生きる」姿であったと確信をしています。

9月2日（土）に名古屋のナビロフトで開催された公演には67名が来場、56名から感想がよせられました。大変好評で、みなさん楽しまれたようです。劇中で提示されたジェンダーやセクシュアリティに関する話題や問題について、「考えさせられた」というコメントがもっとも目につきました。ジェンダーについて偏見がないつもりの人にも自分が認識していなかった問題への気づきがあったようです。「自由」という言葉の余韻、取り扱った問題の広さ深さへの感慨にも触れられていました。「あなたの性別は何ですか？」そんな単純そうな問いかけに答えることの難しさも様々な形で受け止められたことが確認できました。問い直しの輪は確実に広がっています。

(文責 本学非常勤講師 加藤 みわ子／石河 敦子)

(\*1) ニュースレター 43号 (2017年3月15日発行)  
<http://www.aasa.ac.jp/institution/igws/newsletter/pdf/43.pdf>

(\*2) 愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 (2014)  
『問い直しの輪を広げるために ―演劇的アプローチによる「違いを共に生きる」啓発プログラム報告書』

成果発表公演の当日、この科目を履修した学生さんたちからいただいたコメントの一部をご紹介します。

- 唯一の男子学生としての参加で、最初は戸惑う場面も多くありました。しかしこの授業をとおして、男女で物事を考えるのがバカらしく思えてきました。「自分らしく」生きていくことが大切で「自分らしく」生きていきやすい社会に一步でも近づくといいなと思って演じました。(葛西 和真)
- 同学年の学生さんだけではなく、先輩や後輩と愛称で呼び合いながらもお互い高め合える関係を築けたことが幸せでした。(佐藤 あさひ)
- 結構過激でストレートな表現が多かったけど、嫌悪せずむしろ伝えたいという思いで皆が取り組めていました。授業にとって良かったです！(太田 侑伽)
- 学部を超えて集まったので、いろいろな人と交流も深めることができたのが良かったです。たくさんの人に支えてもらった公演でした。(衛藤 さくら)
- 頭を使うだけでなく体を動かしながら考えていく授業だったので、柔軟に話を進めることができて楽しかった。(奥田 咲菜)
- ジェンダー・ダイバーシティの授業を受けてから、あれもジェンダーなのか、これもジェンダーなのかと考えるようになりました。卒業制作でジェンダー問題を取り上げているため、この授業は参考になりました。(廣田 桃子)
- 「ジェンダー」というワードをぼんやりと「男らしさ」「女らしさ」とは何か、みたいなもの考えるものだと思っていましたが、今回の授業で、身近にこんなにジェンダーにかかわることが多いということが分かりました。演劇が好きでこの授業をとったのもあるのですが、ジェンダーに対して、もっと詳しく知りたいと思うようになりました。(古部 未悠)
- 最初は考えることが苦手で、どうすればいいか沢山悩んだこともありましたが、色々な人と「性」について濃く話ができ自分の価値観が広がったと感じました。(朴 海美)







# “自分らしく”あることを 考え続けた、今の結論

山田 星河



愛知淑徳大学を卒業してから3年半、わたしはいま東京で暮らしています。コンクリートジャングル、狭い部屋、高い物価、常に他人の存在があまりに近いこの大都会のなかで、わたしは一度自分を見失い、大きく崩れてしまいました。仕事場に行くことができなくなり、常に「できなきゃいけない自分」とたたかっていたわたしにとって、これは人生で一番苦しい経験でした。

なぜなら、今まで自分が必死にすがってきた考えが、自分の首を絞めてきたものと同じだったからです。この価値観は、自分が生きるための正当防衛でもあったわけで、そのおかげで多くのことを成し遂げられたことも事実。でも結局「できなきゃいけない自分」とは、他人からみた視点でしかなかったのです。いまなら、そんな過去の自分に「おつかれさま、えらかったね」と言ってあげられます。しかし、そこに行きつくまで、長い時間がかかりました。

なんとか変化してこられたのは、名古屋や東京で出会った“自分らしく”生きることを実践している人たちに助けられ、しかも身近な存在であったために、大きく励まされてきたからです。

そんな人たちに共通していると感じるのは、自分らしさを内側にとどめず、周囲や社会に対して発信しているところにあります。そしてそれを周囲の環境やひとによって脅かされるときには、的確に反応し、怒りや悲しみなど気持ちをきちんと伝え、相手と対峙するのです。それをみて“自分らしさ”を周囲から守ることの重要性を考えはじめました。嫌われたくないからとあいまいにして、自分の気持ちをごまかし、周囲の空気に流されてしまうことはありがちです。でも、周囲に自分らしさを合わせようとするのでは結局自分が苦しくなってしまう。自分らしさを周りが理解してくれたとき、それが自信へとつながることを、いま実感しています。

これに付け加えるようになってしまっていますが、“自分らしさ”と同じく、わたしは“女性らしさ”というのはいずれの生き方であって、周りから強要されるものであっていいはずがないと思っています。男性議員による女性議員への侮蔑発言がテレビでも取り上げられますが、結局ワイドショーなどでは本題からそれてしまう。わたしは彼らから“支配”のおいを感じます。

もう5年ほど前になる、在学中に所属したゼミでの沖縄旅行は、わたしの人生のターニングポイントになりました。ゼミ旅行期間が、在日米軍基地普天間飛行場にオスプレイが配備される日とかぶり、わたしはひとり普天間基地のゲートを訪れました。そこで、在日米軍基地によって生活が壊されている人々に出会ったのです。

あるおばあが、「命どう宝」（ヌチドゥタカラ）という言葉を見せてくれました。沖縄戦で奪われてきた命、

その命の尊さを次の世代につなげるために基地に抵抗しているのだと、話してくれました。あまりの沖縄の歴史と眼前の現実にショックが大きく、こころの奥がもたれ、痛み疼きました。それから、できうるかぎり沖縄へ通うようになりました。

2016年4月28日に沖縄県うるま市で、20歳の大学生RENAさんが、在日米軍基地の元海兵隊員にレイプされ殺されました。身体がげずられるような感覚が再びめぐりました。女性が暴力の矛先を向けられることについて、これほどショックなことはありません。そして一気に恐怖と怒りが湧いていきました。

沖縄には戦中、多くの慰安所がありました。つい先日も宮古島を訪れた際、朝鮮半島などから無理やり連行され日本軍の慰安婦をさせられていた女性たちがいたことを伝えるアリランの碑を訪れました。そこには慰安婦をさせられた女性たちの、それぞれの国の言語で、「女性たちが苦しまないように戦争をおこさせない」という文言が刻まれています。軍隊による女性への支配は昔から変わっていないのだと痛感します。

慰安婦を認めない政府や、女性を蔑視したり議場で女性へ最低なヤジを飛ばす男性議員もそうですし、レイプされた女性を非難するような社会のゆがみがあるから、女性を危険にさらし続けているのではないのでしょうか。日本はなまじ民主主義が存在しているし、男性も女性も平等だから安心だと思っている人たちはたくさんいます。でも本当は、そんなんじゃないという兆しは無数に現れていますし、性暴力もあとをたちません。それに“支配”のにおいを感じさせる人たちはたくさんいますし、残念ながらそれを許してしまう空気も存在しています。

この社会で、女性も男性もあらゆる性をもつひとたち誰もが“自分らしく”生きることができるようになるために、そして誰かが“支配”され侮辱されてきたことを繰り返さないように、知るべきことがたくさんあります。そして知らせるべき人もいるし、やめさせなくちゃいけないことがあることもわかってきました。だから、もっと社会に対して貪欲でありたいと思っています。

(メディアプロデュース学部クリエイティブライティングコース  
2013年度卒業)



エッセイ

ジェンダー視点を含めて  
日々感じていること

チョ スルソップ (曹 述燮)



韓国の実家の塀一つを隔てた隣家には今年 89 歳になる伯母が一人で生活している。20 歳そこそこで伯父と結婚し、かの朝鮮戦争中に夫を亡くしてから 66 年の歳月が経っているが、未だに初めての嫁ぎ先である我が家で暮らしている。本家の後継ぎとして迎え入れた養子・我が実兄を育てるかたわら、揃って長寿された舅姑、つまり我が祖父母の面倒を 30 年間以上も見るという生活だった。韓国が伝統社会のシステムのままであるなら、「節婦」の表彰に値する。律儀すぎるほど律儀な人生を送られた方なのだ。母はまた嫁いで以来、隣家に住まう舅姑と自分の実子の世話をする寡の兄嫁をいただきつつ、夫と残りの 4 人の子を育てる生活であった。伯母にとっても、母にとっても嫁暮らしは相当神経を使わざるをえないものだったと思う。

わたしは大学を卒業してすぐ留学の途についた。最初から博士学位を目指しての留学だった。長くなることが予想されていた。それでも母は理解を示すのみならず、支援を惜しまないつもりだと言ってくれていた。そんな母だったが……。留学の間、いつの間にか 30 歳を過ぎていた。主義からではない独身だった。あつという間の至って自然な出来事だった。その間、年 1 回ほどは帰国していたと思う。ところが、里帰りをするわたしを見つめる母の眼差しが時とともに変化していった。最初は喜びで一杯。もちろんしばらく離れていた娘に会えた喜びだ。それから 3・4 年経ってからは、「あんた、結婚はどうするの?」。冗談じみた声かけの裏に心配の色が滲んでいた。さらに 3・4 年経ってからは、「可哀想にもうダメかも～」の憐みと怨みがこもっているかに思えた。何も言わなくなってきた。やり始めた学業に対する理解がないわけではない。がしかし、いわゆるオールドミス の身で、外国で一人暮らしをしている娘を見る母の思いが穏やかでないのが手に取るように感じられた。

それからまた何年かが経ってのこと。米国人の連れあいの実家を初めて訪れた時の出来事だ。当時韓国で勤めていた彼の仕事の都合もあり、ソウル経由の飛行機で合流しアメリカに向かった。デトロイトでの乗り継ぎを含め、ほぼ 20 時間以上の飛行でシカゴ空港に到着。友人が自家用車で迎えに来てくれていた。5・6 時間を走ったところの友人宅で、その晩は途中泊をし、翌日レンタカーでさらに 4・5 時間を走り、イリノイ州の片田舎にある彼の実家に着いた。昼過ぎだった。庭先に日差しを避けるためのテントと長テーブル、椅子等が置かれ、結構な数の親戚・兄弟が集まっていた。隣にはハンバーグを焼く炭火が炊かれ、自由な飲

食と懇談のかたわらわたしたちの到着を待っていた。紹介され、ハグされ、声をかけられつつ……。なにぶんわたしにとって初めて会う彼の親族。「な～に、これ??」と意外さに内心驚くばかり。

夕方に近づいてきた時分にはくたくたになっていた。食事を勧められた。お腹が空いている。肉好きでもある。しかし、パンに挟んだハンバーガーを食べる気はしなかった。

「あ～、温かいご飯が一杯あるとな～!! (따뜻한 밥 한 그릇 먹었으면 좋겠다.)」

しばらくぶりの里帰りで興奮気味な彼。家族との話に興じつつ、先ほどから何度か大丈夫かと聞いてくる。その気遣いにすがるように、そっと口をついて出た言葉だった。ところがだ。

「ダディー、家にお米あるか。スルソップがご飯を食べたいそうだ。」

「え～!? そんな不慮なことを口にする。それもパパに～」またの意外の驚きに、今度は恥ずかしさが増し、穴でもあれば入ってしまいたい気がした。もう何も言えたものではなく、展開を見守る。

「あるよ。わしが作ろう。」

父は二つ返事でその場で立ち上がり、鍋にインディカ米とお水をこぼし入れ、火にかけて沸かし始める。間も無く鍋から湯気が上がる。父が待った無しで鍋蓋を開け、大きなスプーンでかき混ぜ、「できたよ。」とテーブルに置いてくださる。わたしは目一杯慌てふためきながら、あのインディカ米のご飯ならぬご飯を如何にも美味しそうに食べる振りをしながら口にした。ほぼ 20 年が過ぎているが、まだ昨日の出来事のように思える記憶だ。

男性本位の既存秩序が支配する伝統社会における女性性は、人間としての権利より犠牲と服従が強要される生き方を背負わされていた。そこからの脱出は、男女平等思想を伝える女性教育と新しい社会作りを目指すものたちの社会運動、政治運動、啓蒙運動により少しずつ進歩をなし遂げてきている。どの国となくそれは道半ばなのである。

「日本で男女平等 なぜ難しいの? 世界経済フォーラムによる男女格差指数のランキング (2016 年版) 144 カ国中 韓国 116 位、日本 111 位 (朝日新聞 2017/06/02 総合)」。新聞を読みながらも、この手のニュースにはすぐ目が行く。きっと自分にとって少なからず気になるニュースであるからに他ならない。

(本学交流文化学部教授)

## 第35回定例セミナーのお知らせ

### 女性活躍って誰のもの？—男女ともに、 就活前に知っておくと役に立つ「女性活躍推進法」のお話

**講師** 皆川満寿美さん（早稲田大学ほか非常勤講師）

**日時・場所** 2017年12月1日(金) 11:10-12:40 星が丘キャンパス 13D 教室  
15:10-16:40 長久手キャンパス 413 教室

\*詳細については後日、チラシ、研究所ホームページ等にて告知いたします。今回は、男女にかかわらず知っておくと役に立つ、実践的なお話を伺います。これから社会人となる学生さんはもちろんのこと、広く、関心のある皆さまのご参加をお待ちしております。

## 施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

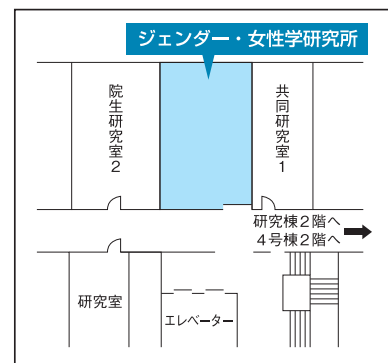
**開室日** 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

**場所** 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階エレベーター前

### 案内図



### ■長久手キャンパス8号棟 4階



## 編集後記

今年度、本学で開講した「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習Ⅰ・Ⅱ」は、演劇をとおしてジェンダー/ダイバーシティを学ぶ、ユニークな科目です。初年度の成果は、ニュースレターでもご報告しております。成果発表公演では、学生さんたちが自ら紡いだ言葉をちりばめた作品と演技のすばらしさ、彼らの公演にかける熱量に、思わず涙が溢れました。「ジェンダー」の学びを拓く新たな試みに、これからもご注目くだされば幸いです。(中村奈津子)

## ASU・IGWS2017年度

**運営委員** \_\_\_\_\_  
渡辺かよ子(所長兼) 赤星泰子 石田好江  
小倉史 小野美和 坂田陽子 佐藤朝美  
平林美都子 藤木美江 前田恵子

**事務担当** \_\_\_\_\_  
中村奈津子